琉球大学学術リポジトリ

《英語科》協調学習を通したコミュニケーション能力の育成：「知識構成型ジグソー法」を取り入れた授業づくり

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属中学校
	公開日: 2016-10-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浦﨑, 多恵子, 山本, 耕司, 上原, 明子, 大城, 賢, Urasaki, Taeko, Yamamoto, Koji, Uehara, Akiko, Oshiro, Ken
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35465

《英語科》

協調学習を通したコミュニケーション能力の育成

ー「知識構成型ジグソー法」を取り入れた授業づくりー

浦﨑多恵子*　山本耕司*　上原明子*　大城賢**
*琉球大学教育学部附属中学校　**琉球大学教育学部

Ⅰ　主題設定の理由

これからの時代は、急速な社会の変化やグローバル化の進展に伴い、様々な人々とコミュニケーションを図りながら協力して新しいことを生み出していくことが求められるようになる。中教審教育課程企画特別部会「論点整理」の育成すべき資質・能力「三つの柱」の１つに「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力）[(1)]」があげられており「対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解」することや「伝える相手や状況に応じた表現」ができることが求められている。また、外国語教育においては、「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに，身近な話題についての理解や表現，簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う[(2)]」ことが目標とされている。

本校では知識構成型ジグソー法を用いて、共有された課題についての自分の考えを相手に説明したり、相手の考えを聞いたりしながら自分の考えについて比較や吟味、修正などを行い、自分なりの表現方法を持ち、より質の高いものにしていく協調学習に全教科で取り組んできた。

英語科では、２年間にわたり、協調学習における知識構成型ジグソー法を取り入れた授業づくりに取り組むことで、学習課題に対して生徒が主体的に他者との対話を行い、最終的にはより質の高い英語でのコミュニケーションができることを目標として授業づくりを行ってきた。

昨年度の成果と課題を以下に示す。

〔成果〕

- ジグソー活動を通して、教師が事前に想定していた「期待する解答の要素」を満たすような話し合いを概ね行うことができた。英語科が目的にしていた「意味内容を伴った意見や情報の交換」をする対話を進めていく中で、教師の予想を超えるような優れた発言や記述もみとることができた。
- 知識構成型ジグソー法により、生徒の自分自身の「ことば」で伝えたいというモチベーションを高めることができた。
- 知識構成型ジグソー法の授業後にパフォーマンステストを行うことで、ジグソー活動で獲得した成果を生徒が英語で発信するという流れを作ることができた。

〔課題〕

- 生徒が英語で表現したい事と生徒の表現力の間にギャップがある。
- メンバー構成や、課題の難易度、活動時間によっては対話が進まず、結果として十分な解決に至らない、理解が深まらないという意見が事後アンケートの回答に挙がっていた。
- 知識構成型ジグソー法の授業後のパフォーマンステストでは、知識構成型ジグソー法の授業で考えたり、学んだことが、どう答えに反映されているかをみとるための明確な評価基準をどう生徒に示していくかが不明確であった。

昨年度の課題を解決するための取り組みを以下に挙げる。

生徒が表現したい事と表現力の間のギャップについては生徒の英語での表現力を向上させるために、コミュニケーションを支える文法事項も取り入れた知識構成型ジグソー法を用いた授業の可能性を探る。また、知識構成型ジグソー法を用いた授業以外でもコミュニケーション能力の育成を意識した取り組みを充実させる。

知識構成型ジグソー法で、明確な答えが得られない不安がある生徒については、対話を通して課題を解決しようとする過程が大切であることを伝えていきたい。また、１人で解決できるので１人の方が良いという生徒が

出ないように、他のメンバーがいるから解決できる課題の設定が不可欠である。課題の難易度も生徒の実態に合わせていく。ジグソー活動を通して、他者と一緒に活動することで自分の強みを生かせるという体験を積ませ、多様な人々との議論を通じて自己成長していくことが将来大切になってくるというメッセージを送っていきたい。

パフォーマンステストの際に、生徒に示す評価基準については、生徒の思考を遮ってしまわないように注意して、できるだけ示すようにする。しかし、パフォーマンステストにおいてどのように表現してほしいかを具体的に示しすぎると、生徒自身が相手にどのように伝えれば良いのか考える前に、答えを示すことになる。もちろん教師の方では明確な評価基準を持っているが、生徒にどこまで示すのかは、課題によって異なってくる。

本年度は２年間取り組んできた知識構成型ジグソー法を取り入れた授業の課題を改善し、生徒のコミュニケーション能力の育成を効果的に行えるように本主題のもと研究を進めていく。

Ⅱ　本研究の目的

知識構成型ジグソー法を用いた授業の実践を通して、より質の高いコミュニケーション能力の育成を目的とする。

Ⅲ　研究仮説

生徒がコミュニケーション活動を行う場面において、知識構成型ジグソー法を用いてコミュニケーションにおける大切な要素を意識させることで、より質の高いコミュニケーション能力を育成することができるであろう。

Ⅳ　研究内容

１　研究計画

表１　３年間の研究計画

１年次	テーマ「主体的に他者と対話を重ねながら英語を学ぶ生徒の育成―学習者同士の相互交流を図る授業の工夫―」 ・「対話」と「深い理解」の定義と高めたい力の具体化 ・「知識構成型ジグソー法」の捉えと授業づくり ・対話からの学びの評価の検討
２年次	テーマ『協調学習を通したコミュニケーション能力の育成―「知識構成型ジグソー法」を取り入れた授業づくり―』 ・目指す生徒像の修正 ・「知識構成型ジグソー法」を用いた授業づくり ・対話からの学びの評価の改善
３年次	・「知識構成型ジグソー法」を用いた授業づくり ・対話からの学びの評価とまとめ ・本研究のまとめ

本年度は、知識構成型ジグソー法を用いた授業の年間計画（表２）を立てた。昨年度は各学年、年間３回程度であった知識構成型ジグソー法を活用した授業を今年度はさらに充実させ、計画的に生徒のコミュニケーション能力の育成を図っていきたい。

表２　知識構成型ジグソー法を用いた授業の年間計画

学年	実施項目・内容等	実施時期	備考
1	自己紹介活動	6月	
	要約文作成(Program6)	10月	
	人物紹介(Program7)	**11月**	**公開授業**
	ジグソーリーディング(Program11)	2月	
2	日記作成(Writing)	4月	
	フィンランドの旅行計画(Program2)	5月	
	Speaking活動	**11月**	**公開授業**
	道案内(Power up Speaking4)	11月	
	賛成意見や反対意見を言おう	2月	
3	現在完了の各用法について	5月	
	場面に応じた自己紹介活動	5月	
	3Rs歌詞タイトル作成(Program3)	6月	
	ジグソーリーディング(Program4)	7月	公開授業
	日本文化を説明しよう(Program6)	**11月**	**公開授業**
	ジグソーリーディング(Program7)	11月	

２　英語科が生徒につけさせたいコミュニケーション能力

本校英語科では、既習の文法事項や表現を使って、単に相手とのやりとりを行うのでははく、相手の事を考えたり、新しい関係性を築くためのやりとりができるような力をコミュニケーション能力と捉えている。斉藤(2004)は、「人と人との関係を心地よく濃密にしていくことが、コミュニケーションの大きなねらいの一つ[(3)]」と言っている。本校英語科では、ただ単なる情報伝達だけではなく、より良い人間関係を築いたり、新しい考えを創造して共感できる力を育てていきたい。英語の学習を通して、生徒にこのコミュニケーションのねらいの一つを身につけさせたい。

また、自分の考えを英語で伝えるためには、その土台となる文構造の理解や書かれた文の裏にある気持ちをくみ取るなどの読解力もコミュニケーション能力に含まれると考える。

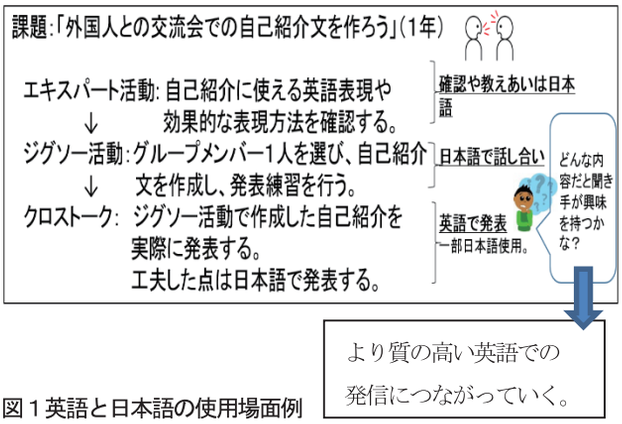
３　知識構成型ジグソー法を活用したコミュニケーション能力の育成

本校英語科では、英語を用いたコミュニケーション能力の育成のために、生徒が英語を用いて相手に自分の考えや伝えたいことを表現し、相手が表現する事を理解する活動を普段の授業の導入や練習で行っている。これらの活動の他に、知識構成型ジグソー法を取り入れることにより、生徒がそれまで学習した内容の中から選んで、実際に英語を使う場面を生徒に体験させることができる。生徒が深く考える時間を設け、仲間と共に課題解決に取り組むことを通して、コミュニケーション能力の基礎となる言語習得にもつながると考える。

経験学習モデルを提唱するコルブ(2015)は、「体験する→振り返る→気づく→行動計画を作成する→（再び）体験する・・」という動きが「学習」であり、その継続が「成長」であると述べている。無限に知識を吸収し続けることが「学習・成長」ではなく、自分で自分の体験を振り返り、そこに気づきを得て次の計画を立て直し、再び新しい経験に挑戦していくことが「学習・成長」であるというのである[(4)]。知識構成型ジグソー法の活動の中にもコルブが述べている「体験する→振り返る→気づく→行動計画を作成する・・」という学習のプロセスを踏むことができると本校英語科では考える。よって、知識構成型ジグソー法を活用することで、どうすればさらに良いコミュニケーションが図れるのかをジグソー活動の課題を通して生徒自身が考えたり、深く考えたことを生かして英語で発信する機会を設けることができる。ジグソー活動やクロストークでの気づきを経た後、再び英語での発信を経験することにより、さらに質の高い英語でのコミュニケーションが可能になると考える。

しかし、グループでの話し合いの際、中学生にとって、考えたことを英語で話し合うことは、かなり困難である。本校英語科では、生徒が知識構成型ジグソー法を用いた学習課題に取り組む際、課題の内容や質など、必要に応じて日本語の使用を認めている。ただし、最終的には、課題に対して自分の意見を述べる際には英語での発信を目標にしている。コルブが述べる「振り返る→気づく」の段階で日本語を使用して考えを深めることで、英語でのより質の高いコミュニケーションにつながると考える。

以下は知識構成型ジグソー法を用いた授業で「外国人との交流会での自己紹介文を作ろう」という課題における生徒の英語と日本語使用の場面の例である。



より質の高い英語での発信につながっていく。

図１英語と日本語の使用場面例

４　授業づくり

(1)　目指す生徒像

対話の中で学んだことを生かして、自分の「ことば」でコミュニケーションを図ろうとする生徒

英語科では３年間を通じて上記のような生徒の育成を目指し、「知識構成型ジグソー法」における学習課題の設定を工夫し、学習者がコミュニケーションにおける大切な要素に気づき、最終的には英語で伝え合うことができる授業づくりを行っていきたい。

(2)　英語科における知識構成型ジグソー法の基本構成

本校英語科の知識構成型ジグソー法の基本的な流れは以下のStep１～５のようになる。昨年度、中１で行った「スキット作成」の授業の例を流れの下に示す。

Step1 事前活動：

活動に取り組む前に、生徒各個人が課題に対する自分なりの答えを書く。

例）事前課題として提示された「もしも自分のクラスに英語しか話せない転入生が来たときにどんな会話をしますか？」に対して、自分なりの答えを英語で記入する。

Step2 エキスパート活動：

基本的に生徒は３つのグループＡＢＣに分かれ、それぞれ違う情報について話し合ったり、読解等に取り組む。

例）エキスパート活動では、転入生１人とクラスメイトになる２人のA,B,C３人の英語で書かれた自己紹介文を仲間と読む。その人物について説明ができるように、わからない部分は教え合う。

Step3 ジグソー活動：

生徒が取り組むメインの課題を教師が提示する。

（課題によっては Step1 で提示することもある。）エキスパートＡＢＣを学習した３人（または４人）が１つのグループとなり、情報交換を行う。その後、ＡＢＣで得た事を生かして、課題を解決する。

例）ジグソー活動ではA,B,Cの３人が集まり、それぞれの人物について英語で紹介しあう。その後「初めて出会う３人が仲良くなっていくスキットを作ろう」という課題が与えられ、ジグソーグループでスキットを作成する。

Step4 クロストーク：

ジグソー活動で出された課題に対するグループでの答えを発表し、クラス全体で共有する。その際、英語でアウトプットする機会となるようにする。発表を聞く生徒もコメントや評価をつけるなどの活動を行う。

例）クロストークでスキットと工夫した点を発表する。クロストークでは、他の班からも違う考え方や良い点を学ぶことができる。

Step5 課題への個人の取り組み：

事前活動と同じ課題、または発展課題に個人で取り組む。

例）「もしも自分のクラスに英語しか話せない転入生が来たときにどんな会話をしますか？」に対して、自分なりの答えを英語で記入する。

Step6 可能であれば、パフォーマンステストを行う。

例）パフォーマンステストでALTに転入生役になってもらい、生徒は個人で転入生役のALTと英語で1分30秒間話をして仲良くなろうという課題に取り組む。

事前課題では、「転入生に話しかける際、気をつけることは？」という質問に対して、「ジェスチャーをつける」「楽しそうに」と書いていた生徒が、ジグソー活動後には「相手の興味がある事を聞く」「お互い興味があることに誘ってみる」というように会話の内容やコミュニケーション技法に意識が向く生徒の変化が見られた。

⑶ 知識構成型ジグソー法を用いた授業での教師の役割

授業の中のエキスパートやジグソー活動では、教師は支援の役割を担う。本校英語科では答えを方向付けてしまうような質問に対しての回答はしないが、単語の読み方など内容に影響しない程度の質問には答える。また、話し合いが滞っているグループには声かけを行う。教師が生徒の活動の様子を見て、生徒の話し合いを促すように介入する。

また、生徒が取り組むメインの課題の設定が大切である。課題に関しては、違った理解を統合しエキスパート活動やジグソー活動において、生徒同士が対話を進めて課題を解決することができるように設定する。これまで作成したメインの課題は、自分の感じたことや意見を英語で表現したり、より良い道案内や自己紹介など、英語科では生徒の様々な発想を引き出すものが多い。

５　対話からの学びの評価

対話からの学びの評価は、以下のように⑴授業（「思考・判断」）評価と⑵コミュニケーション能力（「表現」）の評価にわけることができる（図２）。

⑴の「思考・判断」は⑴は生徒の「思考・判断」が授業を通してどのように成長していったのかを検証することで、授業改善につなげるためのものである。⑵は、生徒が対話を通した後の理解と深まりを見とり、生徒にフィードバックし、生徒が改善につなげられるようにするためのものである。⑴⑵を分けることで、授業者と生徒の両方が成長や改善点を把握することができると考え、評価の方法を２段階に分けた。ここで使用する⑴⑵の評価は、文科省が示す「思考・判断・表現」とは分けて考える。

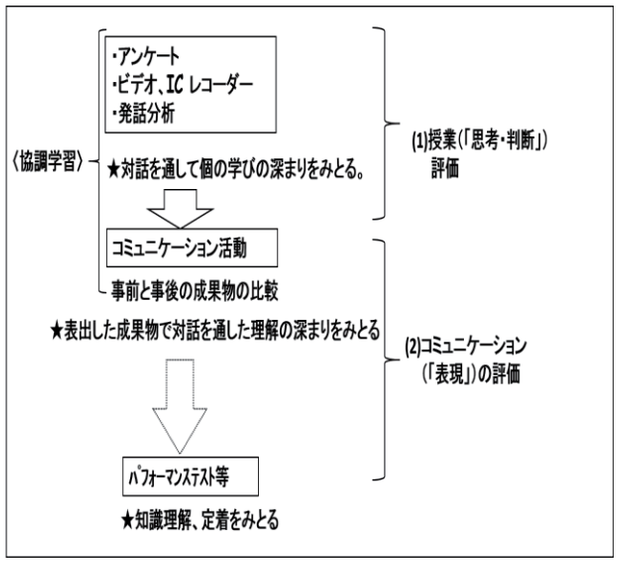


図２　対話からの学びの評価の計画と方法

⑴ 授業（「思考・判断」）評価

授業（「思考・判断」）の評価では、その授業の対話を通してこの学びがどのように深まったのかを検証していく。

方法としては、①生徒へのアンケートや自己評価、②記録音声(IC レコーダー)等を用いる。

①のアンケートについては、昨年度は英語科で時期や内容を統一して「ジグソー法の授業において、メンバーとの対話を通して、課題を解決できていますか？」のような抽象的な質問をしていた。今年度は、例えば、「日記を書こう」のジグソー法を活用した授業の直後に、「英語で日記を書くポイントが分かりましたか？」「英語で日記を書くために大切だと思うことを全て書いて下さい」「事後活動で個人で日記を書くにあたって、ジグソー活動で学んだことは役に立ったと思いますか？」等、それぞれの活動で身につけさせたいことが生徒の学びに結びついているかが分かるようなアンケートを実施していく。また、生徒のワークシートからジグソー活動の事前と事後の課題に対する答えの質の変化を見ることによって、その活動が有効であったか教師が授業を評価することができる。

⑵ コミュニケーション能力（「表現」）の評価

パフォーマンステストや生徒の作品やワークシートから、生徒のコミュニケーション能力（「表現」）の評価をすることができる。

知識構成型ジグソー法の授業を通して、学んだことが実際にコミュニケーション活動で生かされているかをみるために、実践的な課題のパフォーマンステストで評価をする場合、これまでには、ＡＬＴとの会話や道案内を英語で行う等に取り組ませ、評価を行ってきた。

パフォーマンステストで生徒が成果を出せるように、ジグソーの課題の設定がまず大切になってくる。

パフォーマンステストにおいては、テストの前に生徒に「コミュニケーションをとる時にポイントとなる要素を含んで英語で表現しているか」という評価基準を示す。

例えば、4(3)で挙げた授業後、「クラスに入ってきた外国人の転入生に話しかけよう」というパフォーマンステストでは、「外国人の転入生と仲良くなることができる会話を１分30秒間展開することができればA」という基準を示すことができる。

また、知識構成型ジグソー法の授業後の事後活動の作品から評価することもできる。「日記を書こう」という知識構成型ジグソー法を用いた授業前後に、英語で日記と質問の回答を書かせたワークシートにより評価の例を挙げる。

表３　ワークシートの記述

事前活動	I went shopping with my friend last Sunday. I bought T-shirt. It's my favorite T-shirt. I ate ice cream.
事後活動	I went shopping with my friend. At first I ate ice cream. It was delicious. Then, we had hamburgers for lunch. （略）I bought a T-shirt after lunch. I like it very much. I had a good time.
事後活動	「英語で日記を書くにあたってあなたが大切だと思うことは何ですか？」 （回答）何をしたかだけを書くのではなく、具体的に何をしたかを書いたり、その時自分が思ったことなどを書く。自分の気持ちを書く。分かりやすく書き、つなぎ言葉を使う。

評価基準は外国語表現の能力において以下のようになる。

評価Ａ	topic→body→ending の流れを持ち、事実をわかりやすく書くだけでなく、自分の気持ちや印象を書いている。
評価Ｂ	事実をわかりやすく述べている。
評価Ｃ	体験したことや感じた事実を英語で書くことが全くできない。

上記の生徒のワークシートでは、事前活動で評価はＢであったが、事後活動では、気持ちや時間の流れを表す言葉も意識して使われており、評価はＡとなる。

Ⅳ　授業実践

１　１学年実践事例「人物紹介」

本単元ではプログラム７の発展学習として、これまでに学習してきた語彙や表現、文法事項を生かし、ある人物の紹介文をグループで読みとり、仲間と意見を交流しながら自分の考えを英語でまとめていく授業実践を試みた。

⑴ 主題

PROGRAM 7　Dilo the Dolphin

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 1　開隆堂)

⑵ 目標

・ある人物の紹介文の内容を読み取り、三人称単数現在を用いて、キーワードを頼りに特徴を説明することが

できる。

・相手の好みや特徴を踏まえた上で、どの観光地がいいか、仲間と協力して考え英語で提案することができる。

⑶　本実践の目的

本課では、前課に引き続き三人称単数現在を用いて、人の名前を尋ねたり答えたりできるようにすると共に、人称代名詞の目的格についても学習する。また、イルカを題材にした子どもに人気の本を通して、登場人物の特徴や性格、それに対する自分の気持ちを表現するという題材構成になっている。さらに、スコットランド北部で行われるイルカウォッチングとそれが行われる時期が話題に出ており、異文化理解と併せて自国（地域）の文化を考えることができる単元でもある。

そこで、ある人物について特徴や性格などが様々な視点で紹介されている英文を用い、その内容についてキーワードを頼りに説明することで「伝える」ことを意識した人物紹介の方法を知る。そして、自分の紹介したい人物について、キーワードを頼りに聞き手を意識した紹介スピーチができるようになることを目標とした。さらに、沖縄の観光地という場面設定をすることで、自分の地域の状況や文化を考える機会とし、授業を計画した。

⑷　実践内容

ジグソー法による学習を２時間配当し、エキスパート活動からジグソー活動、クロストーク（一部）を１時間目で行い、残りのクロストークを２時間目で行った。

エキスパート活動では、家族３人それぞれの紹介文を各グループで読み解き、キーワードを用いて説明できるように練習する。次にジグソー活動では、それぞれの情報を共有し合い、それぞれの特徴や好みを考慮した、この家族に満足してもらえる観光地をグループで考える。最後のクロストークでは、グループで選んだ場所とその理由を、実際にALTに説明しながら、クラス全体で共有して考えを深めていくという流れで「課題」を設定した。

①　本時の課題

本授業では、本時の課題を以下のように提示した。

> 課題：
> 海外に住む友達から、「家族３人（夫婦&娘）で沖縄旅行に行くので、お勧めの観光地を紹介して欲しい」とメールが届きました。この家族に満足してもらえる観光地は？

ジグソー活動では、満足してもらえる沖縄の観光地を話し合うことで、相手のことを考えるというコミュニケーション能力の基礎を身に付けさせたいと考え、本実践を行った。

本時の最後に生徒が上記の課題に対して、話せるようになってほしい期待する解は次の通りである。

> 期待する解：
> Chura-Umi is good. Because Emily's father is interested in Okinawan history. He likes fishing too.
> Emily's mother practices Ryukyu dance. And her father likes his wife's Ryukyu dance. Emily wants to see dolphins. Also, Chura-Umi is a very famous place in Okinawa.

②　エキスパート活動

ALTから、「友人家族が旅行に来るが、離島に行く計画もしているため、沖縄本島で過ごす時間が１日しかない。限られた時間で、満足してもらえる観光地を紹介して欲しい。」と説明を受けた後、３～４名の班で次の課題に取り組んだ。

表４　エキスパート資料

＜エキスパートA＞父親の紹介文
○歴史の本をよく読む　○沖縄の歴史や音楽に興味がある
○奥さんの琉球舞踊が好き　○家族で釣りにも行く
○沖縄では有名な場所に行きたい。
＜エキスパートB＞母親の紹介文
○水泳が好きで沖縄でキレイな海が見たい
○琉球舞踊を習っている
○沖縄の食べ物も好きだが、刺身や寿司は苦手。
○ショッピングも好きで、沖縄ではカバンを買いたい。
＜エキスパートC＞娘Emilyの紹介文
○中学生　○父を尊敬　○父とはよく音楽の話をする
○J-popが好きで、安室奈美恵が大好き
○ＰＣをよく使っていて、沖縄のことは沢山知っている。
○イルカを見たり、シーサー作りをしたい。

エキスパート資料の作成においては、それぞれの人物の特徴が、絡み合うように工夫した。理由は、次のジグソー活動において、お勧め観光地を選ぶ際、答えが１つにならないように配慮が必要だったからだ。それぞれの特徴が少しずつ絡み合って、話し合うことで、それぞれのグループの判断で解を導き出すような内容にした。

生徒は男女混合３～４名のエキスパートグループに分かれ、最初にそれぞれの自己紹介文の資料から好みや特徴を読みとる。次に仲間と協力して三人称で表現できる

ように言い換えの練習を行い、最後にキーワードで内容を伝えることができるようにマッピングを用いて、さらに練習をした。

次のジグソー活動でそれぞれの人物の特徴をグループの仲間にわかりやすく説明できるように準備を進めるよう指示した。

③　ジグソー活動

ジグソー活動では、エキスパート活動のグループとは違うメンバーで、男女混合でグループを構成する。各グループ、エキスパートA《父親》、B《母親》C《Emily》の各メンバーが含まれた３人グループで編成した。まず始めに、各エキスパートの情報を持ち寄り、それぞれの人物の特徴を、キーワードを頼りに説明する。次に仲間と話し合ってお勧めの観光地を選び、その理由を英語で説明できるようにする。この家族に満足してもらえる観光地というポイントを意識してコース選びを行っていく。さらに、どんなことを心がけて観光地を選んだのか、日本語での記述も加えた。相手のことを考えるというコミュニケーションの基礎を、この活動を通して気付く機会とする。教師は、エキスパート活動の際と同様に進め方の指示や注意事項、英語で意見をまとめる際の手助け等を行った。

④　クロストーク

クロストークでは、お勧めの観光地をALTへ提案するという形式で行った。各グループの課題に対する考えと理由を英語で発表を行い、クラス全体で意見の交流を行った。各班が考えた「答え」を全体で交流し、共通点や差異に触れることで、課題についての理解を深める。他のグループの発表を聴く際は、ワークシートに簡単なメモ書きをするように指示した。発表者へは、聞き手を意識したスピードで発表することを促した。

クロストーク後には、もう一度、課題に対して自分の考えと理由を書く活動を取り入れた。

⑤　実践の考察

（ア）　授業前後の変容（ワークシートから）

生徒の事前の考えと、ジグソー活動後の考えを、ワークシートの記述をもとに比較する。以下は、３名の生徒の変容である。

表５　ワークシートの記述（授業前後）

生徒	授業前後の生徒の記述（原文ママ）
上位生徒	【事前：　美ら海水族館コース】 美ら海水族館 is good. Because…. ・美ら海水族館 is very popular. ・We can touch ヒトデ and ナマコ. ・It has many kinds of fish. 【心がけたこと】 美ら海水族館を自分が好きな理由を説明した。楽しそうと思ってもらえそうなことを説明した。
	【事後：ひめゆりの塔&おきなわワールド&あしびな～コース】 Because… ・Emily's father likes history. ・Emily's mother likes shopping and ryuku dance. ・Emily's wants to make shi-sa. ・This コース is near the sea. 【心がけたこと】 父・母・子どもの全員が好きなこと、やりたいことができて、一番満足してもらえそうなコースを選んだ。
中位生徒	【事前：　ちゅら海水族館コース】 ・Dolphin. ・ジンベイザメ ・It's has many kinds of fish 【心がけたこと】 たくさんの種類、大きさ、とにかく感動する部分が多いから
	【事後：首里城ショッピングコース】 ・Father wants go to shopping. ・Father likes history. ・Emily makes shi-sa. ・Mother eats Okinaw food 【心がけたこと】 家族が行きたいところを全て入れて書いた。沖縄といえば首里城なので、首里城ショッピングコースを選びました。
下位生徒	【事前：　ライカムコース】 ・be fomous for big ・exciting ・dinner is a lot 【心がけたこと】

	ライカムのいいところ、たのしいところ、ゆうめいなこと
	【事後：琉球村&やちむんコース】 ・Emily wants to make shi-sa. ・Mother like swin. ・Father like fishing. 【心がけたこと】 みんながしたいことや、すきなことをゆうせんにしてえらんだ。

事前活動では、英文で理由を表現できる生徒は少なく、単語での表記が多く見られた。また、お勧めの場所として挙げたコースは、有名な場所や自分が楽しめる場所を挙げている生徒がほとんどであった。授業後には、評価B、Cの生徒も含め、全員が相手のことを考えてコース選びをしている。しかも、「３人のしたいことを必ずいれるように」という指示は出していないが、その視点でコース選びをしていた。本授業のねらいでもある「相手のことを考えたコミュニケーション能力」という視点では成果と捉えたい。下位生徒に関しても、文法やスペルミスもあるが、単語ではなく文章で表現しようとする変容が見られ、英語を書く量が増えていた。「期待する解」の実現については、75%の生徒がA評価であった。ただ、三人称単数現在を使った説明に関しては、全体的にまだミスも多く、継続的な取り組みが必要である。

以下は、クロストーク後の生徒の感想である。

・意外と自分たちと違うところを選んでいるところが多かったのでビックリしました。 ・自分が気付いていないところを発表している人がいたので参考になった。 ・考え方がかたよると思っていたけど、案外、全てのコースをそれぞれ説明していて色々な考え方が聞けた。 ・英語でしっかりまとめていて、簡単なワードでけっこう伝わってきてすごいなと思った。

（イ）　授業デザインの振り返り

生徒同士のグループ活動であっても、下記のようなマッピングによるキーワードを頼りに、英語でお互いの情報を伝え合っていた。（図３）

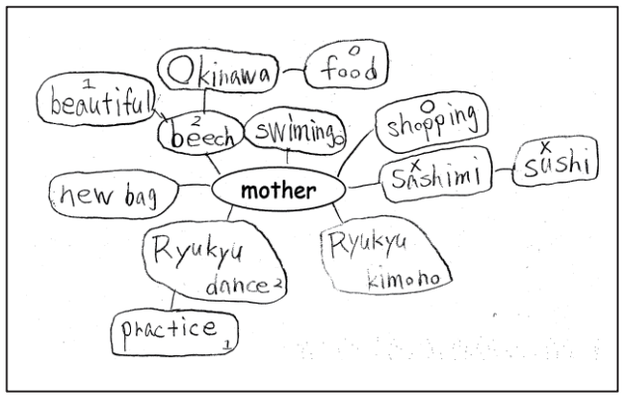


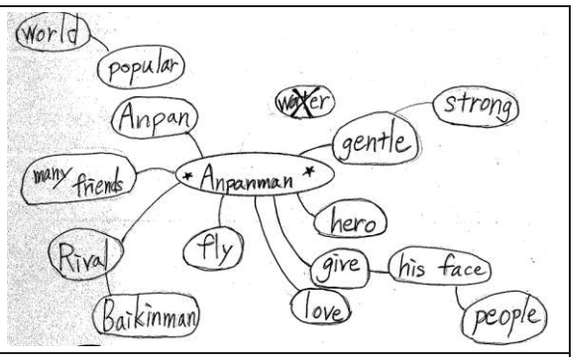
図３　生徒のマッピング例

エキスパート活動の内容を「キーワードを使って伝える」という取り組みは、要点を絞り自分で考えて、ある人物について説明する、という点で効果があった。事後のアンケートにおいて、「ジグソー活動では、自分が担当したエキスパートの内容を、原稿を棒読みではなくキーワードでの説明（伝えること）ができましたか？」という問いに対して、62.5%の生徒が「できた」、35%の生徒が「だいたいできた」と答えている。「だいたいできた」を選んだ生徒の理由に、「相手の顔を見て話せなかったから」という記述も見られ、伝える＝アイコンタクトの意識の高まりも感じ取れる。「あまりできなかった」と答えた生徒は、2.5%であった。

情報共有の後、満足してもらえるより良い場所をジグソー活動で模索していた。生徒のコメントから「同じ場所でも、それぞれ伝える内容（理由）が違っていていい！」「自分たちと同じコースでも違うところを見ている班もあったり、違うコースでも納得できる理由があって、どこも楽しめそうなコースだなと思った。」とあるように、協調・協働の様子が伺える。また、授業を終えての感想において、「あまり英語を読むのは好きではなかったけど、今回は楽しんでできたので、とても良かったと思いました。これを機に、沖縄のことをあまり知らない人に、沖縄の良さを伝えていきたいです。」という記述もあり、全体が肯定的な意見であった。年間を通して、ジグソー活動をする際に、ジグソーの特性や良さ等をその都度説明しながら進めてきたためだと考える。

さらに、事後活動として取り組んだ、「好きな人を紹介しよう」というパフォーマンステストにおいて、キーワードを頼りにスピーチを行った。ねらいは、「聞き手を意識しキーワードで伝える」「三人称単数現在の定着を図る」ことである。

以下は、生徒のキーワード及びスピーチ内容である。



Hi, everyone.
Do you know Anpanman?
He is hero. He is gentle and strong. He can fly. He is made out of Anpan. He doesn't like water. He gives people his face. He has many friends. His rival is Baikinman. He is popular all over the world. I love him.
Thank you for listening.
◆工夫した点◆
その人の良さや特徴を、たくさん、くわしく書いた。絵を加えて内容が伝わりやすいようにした。

（原文ママ）　**図４　生徒のスピーチ作品例**

パフォーマンステストでは、82.5％の生徒が評価 A、15％の生徒が評価B、2.5％の生徒が評価C であった。スペルミス等はみられたものの、キーワードを頼りに、その人の特徴や良さ、さらに自分の思いも加えた、聞き手に内容を「伝えること」を意識したパフォーマンスを心がけていた。

（ウ）　実践を踏まえた授業の改善点

(i) 課題設定

生徒の解答を見ると、エキスパートの切り口や、それに基づいた課題の設定は生徒たちにとって適当だったのではないかと考える。生徒自身が、答えは１つではなく、様々な見方や考え方があることに気づいたことが、大きな成果だった。三人称単数や人称代名詞なども班で指摘し合いながら、取り組んでいた。ただ、人物紹介における三人称単数の定着に関しては、ミスもまだまだ多く継続指導の必要性を感じる。

(ii) 発問・資料の内容

沖縄の現状に合った内容であったため、興味をもって取り組む様子が見られた。また、理由を考える際も各エキスパートの内容が必要になったため、誰か一人だけに任せるのではなく、班のメンバーで情報を繰り返し確認しながら進めていた。エキスパート活動からクロストークまでの一連の活動において、仲間と一緒に考え、分からないところについて教え合うような様子が見られ、個々の差が良さに繋がっていることが感じられた。また、音声記録からも自由に思ったことを口にしながら課題の解決に向けて取り組んでいることがわかった。

エキスパートの資料を作成する際に、工夫したと同時に苦労したところは、それぞれの人物の特徴及びやりたいことの設定である。観光コース選びの際に、単純に結論が出ないようにし、グループのメンバーで人物の特徴を何度も確認する機会を作りたかったためである。また、ベストではなくてもベターな場所を、班で練り合い判断する活動もして欲しいという思いもあった。音声記録を聞いてみると、「どのコースもどれか１つ足りない。はぁ、どうする？」というような、一筋縄ではいかないことへの気づきのつぶやきがあった。しばらく、様々な場所を検討する会話が続いた後、「やりたいこと全部はできなくても、一人ひとりが何か１つはできるようにしよう。」というような発言に変わっている。このやりとりの様子から、資料の内容は適当だったと考える。

当初、エキスパート資料の内容については、各人物の紹介文を、各班でプラス２文作成させ、ジグソー活動において単純に結論が出ないような工夫を考えていた。だが、各班で人物像が異なると、クロストークで混乱が生じる可能性がある上に、取り組む課題多すぎるのではないかという不安があり、アドバイスを頂いた結果、教師側で人物設定の工夫を行うことにした。そのため、生徒は、メインの問いに特化した活動にしっかり取り組むことができた。メインの問いに近づくための資料の工夫や生徒に身につけさせたい力をはぐくむための内容の大切さを改めて学んだ。

(iii) 授業中の支援・授業の進め方

キーワードを頼りに「伝える」という形態をとることで、スピーチの準備（暗記など）に時間をかけすぎるのではなく、自分の言葉で、相手の反応をみながら、伝えることを意識していたので、適当であったと考える。

ALT の友達家族という設定を、もう少し現実的なものにするために、実際の写真やビデオレターなどを活用すると、さらに効果的なものになったのではないかと感じた。

キーワードを使って説明するという活動は、前単元から何度か取り組んでいたため、抵抗は少なくなっている。しかし、キーワードは表記できても、それを簡単な英文で「伝える」というのは、まだ上手くできない生徒もみら

れるため、継続的な取り組みの必要性を感じた。豊かなコミュニケーション能力を育てるためにも、相手のことを考えながら、持っている知識や自分の気持ちを、自分なりの言葉でキーワードを使って発信できるような取り組みを、今後も継続して実践していきたい。

２　２学年授業実践事例

Which holiday season is good to visit Okinawa?

発展学習として、これまでに学習した語彙や表現、文法事項等を生かし、「いつ沖縄を訪れたらよいか」という課題に対して相手意識を持ち英語でより良い提案をさせるという実践を試みた。

⑴　主題　　Speaking 活動

⑵　目標

本活動では、英語で何かを伝える際必要となる伝える材料と考えをエキスパート活動を通してアイディアを出し合うことで、英語で伝える内容を持つことができる。また、ジグソー活動では、３つの時期の特徴について理解した上で、相手のことを意識して、自分たちの考えをわかりやすい英語で伝えることができるようになることが目標である。

⑶　本実践の目的

外国人に沖縄のことを伝える際、沖縄の特徴についての知識と説明できる英語力が必要である。またそれらに加え、相手の状況を考慮し、より良い提案ができる思考回路を育成することが本実践の目的である。

相手の立場に立って考えたり、相手に英語で提案することを通して良い人間関係を生み出すより質の高いコミュニケーション活動を行うことができるようになるために本実践を行った。

⑷　実践内容

①　本時の課題

エキスパート活動を通して、自分の考えを英語で伝える際、相手にわかりやすい表現ができるようにグループで助け合う。そして、ジグソー活動では、エキスパート活動で考えた各季節の特徴を踏まえて、生徒に以下の課題を与えた。

来年沖縄を訪れる予定のALTの弟さんに、夏休み・冬休み・ゴールデンウィークのうち,いつの時期を勧めますか?

期待する解および生徒の姿は次の通りである。

(期待する生徒の姿) ・沖縄の各時期の特徴を考え英語で伝えることができる。 ・沖縄の季節の特徴や相手の興味等を考え、外国人にお勧めする時期を選びその理由を英語で述べることができる。
例)We think summer is good holiday season to visit Okinawa. The Lambert family likes outdoor activities so they can enjoy swimming in the sea. There are many beautiful beaches in Okinawa. They can have BBQ at the beach too. They can enjoy summer festivals. I think Japanese festivals are different from festivals in Canada. Especially, *eisa* is good to see Okinawan culture. So we think summer is good holiday season to visit Okinawa.

②　エキスパート活動

アメリカに住むＡＬＴの弟からのビデオレターを見た後、３～４名の班で次の課題に取り組んだ。(表６)

表６　エキスパート活動

エキスパートＡ：**Activities / Events** 夏やゴールデンウィークは海で泳ぐ、ビーチパーティーできるなど夏、冬、ゴールデンウィークの各時期にあるイベントやアクティビティをウェビングで出し合い、英語で説明できるように練習する。
エキスパートＢ：**Food** 冬はお正月料理や年越しソバが食べられるなど、夏、冬、ゴールデンウィークの各時期楽しめる食べ物をウェビングで出し合い、英語で説明できるように練習する。
エキスパートＣ：**Weather** ○ゴールデンウィークは台風の心配があまりなく気温は夏ほど高くないなど夏、冬、ゴールデンウィークの各時期の気候の特徴やそれに関連してできることをウェビングで出し合い、英語で説明できるように練習する。

ABCそれぞれの分野で季節の特徴をキーワードで書き、ウェビングを作成する。ジグソー活動で各季節の特徴を英語で説明できるように教えあった。書いた英文を読むのではなく、キーワードのメモのみを使って英語で説明できるように、練習する時間を持った。

③　ジグソー活動の内容

エキスパート活動のグループと違うメンバー構成の３人１組で指定されたメンバーでグループを作る。

1．夏休み、冬休み、ゴールデンウィークにできることや特徴をABC一人ずつ英語で発表する。聞きながら、キーワードをメモする。
2．それぞれの季節の特徴を表にまとめる。
3．ビデオレターを見て、Lambert 家族の興味のあることなどを確認する。
4．グループで話し合い、Lambert 家族におすすめする時期を選び、英語でビデオレターを作る準備をする。

どの季節を勧めるかグループで結論を出しその理由も英語で説明できるように準備した。その際、理由等は英文ではなく、キーワードのみを書いて発表できるように準備をした。各季節の特徴を表にまとめることで、スムーズにグループとしての結論を出していた。自分たちで持ち寄ったアイディアを使い、なぜその季節を選んだかという理由も英語で表現できていた。

④　クロストーク

班で出した結論と選んだ理由をビデオレターという形にして英語で発表する。他のグループの発表を聞くことで、自分たちの考えと比較させ、説得力がある内容であるか考えて評価をワークシートに書かせた。発表は全てのグループが行った。

発表の際、黒板には、選んだ季節のプレートと発表のキーワードとなる英単語を書いた画用紙を黒板に貼らせた。良い発表は課題を出してくれたLambert家族にそのビデオレターを送るということで、発表中ｉＰａｄで撮影した。発表の最初は、自己紹介を行い、自分たちの意見をグループ全員で発表した。

⑤　実践の考察

（ア）　授業前後の変容（ワークシートから）

事前事後活動として、活動の前後に同じ質問に回答してもらった。

「Q1. 海外から友達の家族が来る場合、下の３つの中でどの季節が良いと思いますか?選んだ季節に〇をつけ、選んだ理由を続けて英語で書きましょう。」

ここでは、3名の生徒を取りあげ、同じ生徒の授業前と授業後の課題に対する解答がどのように変化したか、具体的な記述を引用しながら示していく（表７）。

表７　ワークシートの記述（授業前後）

生徒	記述内容（原文ママ）
上位生徒A	〈事前〉 I think summer vacation is a good season to visit Okinawa because Okinawa is famous for beautiful sea. If you visit Okinawa in July or August, you can enjoy swimming. ⇒泳ぐことができるという１つの要素のみの説明。
	〈事後〉 I think winter vacation is a good season to visit Okinawa because if you visit Okinawa in winter, you can enjoy New Year's day. You had better to go to Futenma Shrine. A lot of people visit there to pray. You should pick Omikuji. And you can eat Osechi on New Year's Day. Osechi is very good dish of Japan. We have nice cool days but we don't have snow. So Okinawa' winter is a good season. ⇒相手が日本文化に興味を持っていることを意識したお正月の説明、暑い気候が苦手な相手の事を考慮した内容になっている。
中位生徒	〈事前〉 I think summer vacation is a good season to visit Okinawa because you can enjoy swimming and fishing by beautiful sea. ⇒泳ぐことができるという１つの要素のみの説明。
	〈事後〉 I think summer vacation is a good season to visit Okinawa. You should go to a summer festival. You can see beautiful fireworks there. And you should go to the sea. You can enjoy BBQ and swim there. Also, you should eat *kakigori*. Okinawa is very hot but you can enjoy *kakigori*. ⇒アウトドアが好きな相手を意識している。夏に楽しめる祭りと海で泳ぐ以外にＢＢＱが提案されている。又、相手が暑い気候が苦手であるが、かき氷を食べることを楽しめるという説明をしている。
下位生徒	〈事前〉 I think summer vacation is a good season to visit Okinawa because I see sea. They enjoy swimming very much. There are many fish in the sea. ⇒泳ぐことができるという１つの要素のみの説明。
	〈事後〉 I think Golden Week is a good season to visit

	Okinawa because Golden Week is cool. And you can go swimming in the beach and do some outdoor activities with your family. You can enjoy camping. So I think Golden Week is the best time to visit Okinawa for your family. ⇒暑さが苦手な相手を意識した気候の説明がある。この時期に相手が楽しめる好きなアウトドアの提案がされている。

事前と事後を比較すると、ジグソー活動をした後は、各季節で勧めることができる活動の幅が広がり、相手のことを意識した提案となっている。授業前の事前活動では、外国人に勧める季節はほとんどの生徒が夏を選び、理由は「きれいな海で泳ぐことができる。」という解答が多かった。授業後の事後活動では、夏と冬を選ぶ生徒がほぼ同数となり、ゴールデンウィークを選んでいる生徒もいた。その季節を選んだ理由も１点だけではなく、その季節に楽しめるイベントや食べ物、気候などの様々な要素を用いて英語で説明していた。

各時期の特徴を踏まえ、相手の興味や好みを意識した提案をするという「期待する解答の要素」を満たした生徒は９６％であった。英語で相手に伝えようとする積極性は見られたが、”You should eat *kakigori.* “のように、外国の人が聞いてもわからない言葉をそのまま使って説明しようとする生徒が見られたので、本当の意味での相手の立場に立ったわかりやすい説明について考えさせる事と日本文化を英語で説明する技術を身につけさせる事が必要である。

（イ）　授業デザインの振り返り

クロストークでは、全てのジグソーグループの発表において、期待する解である「沖縄の各時期の特徴を考え英語で伝える」ことと「沖縄の季節の特徴や相手の興味等を考え、外国人にお勧めする時期を選びその理由を英語で述べる」という要素が含まれた発表ができていた。

クロストークで他の班の発表を聞いた感想でも次のような記述があり、他の班からも学ぶことができたと考えられる。

- 他の班はちゃんと沖縄の良さと時期の良さを伝えていたのですごいと思った。私たちのグループでは、Golden Week はあまりイベントがないと思っていたが、他の班の発表を聞いて私たちも知れたところがあった。
- 他の班の発表を聞いて、みんな If や can などを使って、なぜ選んだ季節がいいのか、詳しく説明していてすごいと思った。特に、その季節の良い所を言い、何が出来て楽しいとかがあり、納得できた。Can, If は大切だと思った。

また、２週間後の定期テストの中で、ジグソー課題と同じ”Which holiday season is good time to visit Okinawa?”という課題を出題した。

「自分の意見とそれをサポートする考えを英語で述べている。又、相手の興味などを考えた意見である。」をＡ、「自分の意見とそれをサポートする考えを英語で書いているが、相手の事を考慮していない。考えが途中までしか書かれていない。」をＢ、「無回答」をＣとすると、結果は以下の通りであった。（表８）

表８　評価の結果

	A	B	C
英作文(表現)	147 名(92%)	8 名(5%)	5 名(3%)

定期テストの中の１問なので、時間がなく取り組めなかった生徒がいることも考えると、自分の意見を英語で書こうとする意欲と相手の立場に立って提案をするということに関しては、定着率がよいと考える。しかし、Aの生徒であっても、意味は通じるものの文法ミスなどは所々あった。相手の事を考えて、より良い提案をしようと試みるモチベーションに加え、英語運用能力の正確さも上げていきたい。

また、公開授業から１ヶ月後に、パフォーマンステストを行った。パフォーマンステストの内容は、ＡＬＴがジグソー活動と同じ課題である”Which holiday season is good time to visit Okinawa?”と生徒に１対１で尋ね、生徒が英語で自分の意見とその考えを口頭で伝えるものである。またその生徒の答えに対して、その答えに関連する質問を英語で行うものである。例えば、”Which holiday season is the best time to visit Okinawa?”に対して、”I think summer vacation is the best time to visit Okinawa because your brother's family likes outdoor activities. In summer they can enjoy swimming in beautiful sea.”と生徒が答えたら、”Which beach do you like?” ”Are there any other outdoor activities in summer?”のような質問を与えた。

表９　パフォーマンステストの結果

英語の質問に対して、自分の意見を英語でスムーズに伝えることができた。	132 人(83%)
英語の質問に対して、アイコンタクトか音量が不十分であったがスムーズに考えを	

伝えることができた。	15 人(9%)
英語の質問に対して、答えに詰まったり、文法上のミスが多かったが答えることはできた。	11 人(7%)
英語の質問に対して、答えに詰まったり文法上のミスが多く音量も不十分であった。	2 人（1%)

ジグソー活動やクロストークの経験を生かし、８割の生徒は自信を持ってＡＬＴとの英語でのやりとりができていると考える。また、音量などの面から自信のなさが窺える生徒や答えに詰まった生徒でも、ＡＬＴのフォローにより会話を続けることができていた。活動から時間が経過しても、相手に英語で伝える自分の考えを持ち、伝えようとするモチベーションの高さが感じられた。

また、事後活動の後に行ったアンケートで、「沖縄を訪れるおすすめの季節を伝えるにあたって、あなたが大切だと思うことを全て書いて下さい。」という質問に対しては、以下のような回答があった。

・相手がいきたいなって思えるような言葉とか表現を使って伝えるのと、できるだけ詳しく伝えることが大切かなって思いました。
・まず沖縄がどんなところなのか、詳しく教えることだと思いました。そうすれば、どんなところなのか具体的に相手に興味を持ってもらって、季節の中でどんなものがあるか伝えやすい。また、読んでいて楽しくなる、相手が喜んでくれることが大切だと思いました。
・メリットはもちろん、デメリットもちゃんと言うこと。(暑い、台風が来るなど）他の季節と違う点を明確に伝えること。

「理由を具体的に詳しく伝える」「相手の事を考えて伝える」という回答を予想していたが、相手が行きたいと思う言葉や表現のことまで考えている生徒がいた。また、こちらがおすすめする季節をすぐに伝えるのではなく、沖縄全般について説明した上で、提案をするという段階を踏むことやデメリットについても伝えて相手に選択してもらうことが大切だという所まで踏み込んで考えた生徒もいた。

（ウ）　実践を踏まえた授業の改善点

(i) 授業デザイン

生徒の課題への取り組みの様子と生徒の事前事後活動の解答を見ると、課題の設定は生徒たちにとって適当であったのではないかと考える。英語でのコミュニケーション能力を伸ばしたいという面でも、相手の事を意識した英語での提案ができていた所は良かった。しかし、日本語の単語をそのまま使って、説明しようとする生徒がかなり多かった。日本のことを全く知らない外国人がいきなり「かき氷」「初詣」という単語を聞いても理解できないという感覚が生徒には身についていない。相手が本当の意味でわかりやすい英語での説明ができるように、この授業の前に、ある程度の訓練が必要であったと考える。

エキスパートの設定については、最初は、「夏休み」「冬休み」「ゴールデンウィーク」の３つに分けていた。これだとジグソー活動で意見が強い人の「時期」に決まってしまうことが想像でき、後のメンバーの意味がなくなってしまう。アドバイスを頂き「イベント」「食べ物」「気候」の３つにエキスパートを変えることで、すべての生徒の意見が取り入れられたジグソー活動になった。エキスパート活動のどれか１つではなく、全ての要素がジグソー活動で必要となる授業デザインの大切さを改めて学んだ。

昨年度までエキスパート活動やジグソー活動では、生徒による日本語の使用が主になっていたので、今年は活動の中で英語を使う場面が増やすことができないかということを意識して活動を考えた。その中で、生徒同士で英語を使用する場面では、対話が減ってしまうグループもあったが、懸命に英語で伝えようとする姿が見られた。キーワードのみを使って英語を話す練習を今年度から取り入れたばかりなので、英文を見なくても英語で伝える練習に継続して取り組ませ、良質な表現ができるように指導していきたい。

(ii) 課題や資料の提示

エキスパート活動では、それぞれのグループがジグソー活動で使うことができるアイディアを出し合うことができるのか不安であったが、グループごとに差はあったもののそれぞれアイディアを出しあうことができていた。また、生徒自身が考えたアイディアであったので、伝えたいという気持ちが大きくなったのではないかと考える。さらに事前に沖縄について生徒自身が調べる時間があれば、エキスパート活動で伝える情報が増やすことができたと考えられる。

次に、この課題をアメリカに住むＡＬＴの弟にビデオレターの形で提示してもらえたのは、リアリティがあった。また、クロストーク後に、３つのグループを選出し、ビデオレターを撮影してアメリカに映像を送ることができた。これらの作品をお互い観賞したり、クロストーク

で生徒個人が各グループの発表内容の説得力について相互評価しているので、その集計をフィードバックすることで、生徒のモチベーションをさらに上げることができたかもしれなかった。

(iii) 授業中の支援、授業の進め方など

エキスパート活動とジグソー活動の時間配分はおおむね良かったと感じる。しかし、クロストーク前の発表準備の時間は少なかったので、英語が苦手な生徒にとっては大変であったと思う。相手にしっかりと伝わる声量や発表の仕方を意識する仕掛けができるようにしたい。

授業１ヶ月後、パフォーマンステストとして、同じ課題を提示して、何も見ずにＡＬＴに生徒が自分の考えを英語で説明する機会を設けたが、全ての生徒が英語で自分の考えを伝えることができた。ジグソー活動で取り組んだことを、生徒自身の英語で伝える機会をこれからも作り、生徒の自信につなげていきたい。

3　3学年実践事例「日本文化紹介」

本単元では、日本語の四字熟語「一期一会」について、日本文化である茶道における所作の説明を協調学習の資料として用い、外国人に説明する際にキーワードとなりそうな表現を、グループの仲間と対話しながら考え、最終的には英語で伝える活動を行った。

(1)　主題

Challenge 2 英語で茶道 Mike's Visit to Kyoto （SUNSHINE ENGLISH COURSE 3　開隆堂）

(2)　目標

・日本文化でありながら、その理解が十分ではなかったことがらについて、英語を通して理解する。
・日本人にとって当たり前の日本文化を英語で表そうとすれば、どのように表現すればよいかを理解し、英語で表現することができる。

(3)　本実践の目的

学習指導要領において、「内容の取扱い」中に規定されている「外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」との点を踏まえ、日本の文化を英語で表現することをねらいとしている。しかし、自文化についての知識はあっても、それを英語で表現するということになると、どのように述べればよいかということが問題になる。相手の文化にそれに対する概念がない場合は訳語を充てることはできず、説明を加えることになる。そこで本単元では、日本文化の発信に、生徒の興味・関心を向けさせ、どのように英語で表現すれば的確に理解してもらえるかを意識した表現活動に、協調学習を取り入れた授業を計画した。

事前活動として、茶道に関する映像資料を見せて、既有知識や映像からの情報をヒントに、「茶道の重要概念としての『一期一会』の説明を、キーワードを挙げて書かせた。その後の協調学習におけるエキスパート活動においては、茶道の所作や心がけ、主人の客人に対する姿勢などについて書かれたものを３つの資料として準備し、それぞれのグループごとに、キーワードを抜き出し、英語で説明を試みる。次にジグソー活動では、「問い（課題）」を解くために、各班の資料で得たキーワードを頼りに、日本語の四字熟語「一期一会」の説明を話し合い、書き上げる。そしてクロストークでは、全グループがジグソー活動で作り上げた英語での説明をキーワードのみを提示しながら、英語を用いてクラス全体に発表をする。事後活動として、個人で「一期一会」の説明文を英語で書かせるテストを、後日行うという流れで授業を行った（表10）。

表10　授業計画

時	学習内容及び活動
これまで	日本の伝統文化に対する理解を深め、発信力を培う教材 Program 6 Let's Talk about Things Japanese で日本文化を英語で説明する（鳥獣戯画・けん玉）
前時	英語で浴衣の説明（ジグソー教材①）：浴衣に関する英文を読み、英語で説明文を完成させる。
本時	【本時】「一期一会」英語で説明してみよう！ ①エキスパート活動（それぞれの課題に取り組む） ②ジグソー活動（英語での分かりやすい説明を考える）
次時	③クロストーク（多様な「答え」を教室全体で交流する）
この後	個人で「一期一会」の説明文を英語で書く。

(4)　実践内容

①　本時の課題

茶道に関する英文をエキスパート活動の資料(A:「点前」、B:「和敬清寂」、C:「掛け軸・花」、の３つの所作や作法、心がけなどが書かれたワークシート）として用意し、本時の「課題」を以下のように提示した。

日本語の四字熟語「一期一会」英語でどう説明する？

エキスパート活動における「課題」は、各グループに与えられた資料を読み、その内容についてキーワードを用いて英語で説明することとした。資料から抜き出したキーワード（or フレーズ）だけを見て説明できるように、下書きなどをして準備をする。

次にジグソー活動においては、それぞれのエキスパート資料に書かれていたことを、キーワードを提示しながら英語で説明をする。そして、それらのキーワードなどを参考にして、「一期一会」の分かりやすい説明について対話をしながら、英語による説明を考える。

最後のクロストークでは、ジグソー活動で書き上げた５～８文程度の説明文から、３～５個程度のキーワードを抜き出して提示しながら、実際に ALT に説明をして、全体で共有をし、考えを深めていくという流れで「課題」を設定した。

②　エキスパート活動

エキスパート活動では、グループ編成を男女混合の３名×８グループ(計 24 名)と男女混合の４名×４グループ(計 16 名)とした。

事前活動で確認した、「一期一会」という言葉の由来は茶道にあるということと、茶道にからめた説明をすることを告げ、本時の「課題」を前述のように提示した。

「課題」提示の際には、茶室内の写真画像をテレビモニターに映し出し、また茶室内にいる雰囲気づくりのために、和テイストの BGM を流した。活動に入る前には、「一期一会」の辞書的な定義「一生に一度だけの機会。生涯に一度限りであること」を再確認し、それらを踏まえて、課題として取り組むべき内容について、生徒との対話を行う中で確認をした。

エキスパート活動では、上記のグループ編成で 15 分間話し合いと英文記入の時間を与えた。活動時の教師の支援は、単語のスペルや発音のみに限定した。また、次のジグソー活動では、各エキスパートグループに書かれている情報を、３つ以内のキーワードにまとめ、原稿を見ないで英語を使って、グループの仲間に説明ができるよう準備を進めておくことを指示した。

③　ジグソー活動

ジグソー活動では、グループ編成をエキスパート活動で ABC をそれぞれ担当したメンバーを含む男女混合の 3 名×12 グループ(36 名)と男女混合の４名×1 グループ(4 名)とした。

ジグソー活動は 25 分間設定した。ジグソー活動に入る前には、各エキスパートで手に入れた情報を、３つに絞ったキーワードのみを提示して、英語で伝えることを意識させた。本時においては、「一期一会」の英語での説明をすることだけが目標ではなく、伝える場面、状況、相手によって、英語での表現を工夫して伝えることができることを目標とした。

最初は、エキスパート A、B、C それぞれの得た情報をキーワードを提示しながら、伝え合う。次に、各エキスパートグループに書かれていた情報を組み合わせながら、「一期一会」をどのように伝えるかについて話し合い、英文を作成する。活動の様子を見ながら、話し合いのみに終始するのではなく、話し合いを踏まえた英語による説明文を書くことを促した。

④　クロストーク

クロストークでは、ジグソー活動で話し合い、書き上げた説明文を、３～５個程度のキーワードとして抜き出し、それをホワイトボードに書いたものを示しながら、ALT に英語を使って実際に説明を行い、互いの考えや説明の仕方の共通点、違い等を共有する機会とした。それぞれの発表後には、ALT から説明された内容についての質問をしてもらい、それに対して英語で答える場面も設けた。

事後活動として、個人で説明をする筆記テストと、外国人に、日本の文化を紹介する際に工夫したこと・感想・分かったこと・苦労したことなどを書くアンケートを実施した。

⑤　実践の考察

（ア）授業前後の変容

ここでは、3 名の生徒を取りあげ、同じ生徒の授業前と授業後の課題に対する解答がどのように変化したか、具体的な記述を引用しながら示していく（表 11）。

表 11①　ワークシートの記述（授業前）

生徒	授業前　　＊原文ママ
T	（キーワードを書いている） ・お茶　・儀式　・伝統的な日本
Y	Ichigo-Ichie is thought by Sen no Rikyuu. He is a man who produced tea ceremony. He thought, “We have never meet same kinds of tea, tea snacks, tea cup, and tea room in us life.” So we should think important to experience this tea ceremony.
A	（キーワードを書いている）

	・chance　・only　・meeting　・礼儀

表 11②　ワークシートの記述（授業後）

生徒	授業後　＊原文ママ
T	Sen no Rikyu introduced wa-kei-se-jyaku. It refers to clear the atmosphere of the ceremony to soothe the guest hart. The Kakejiku is tea ceremony's theme. The flowers bring a sence of the season to the tea ceremony. The host and the guests enjoy the time as the only chance to meet each other. ⇒エキスパート全ての情報を盛り込んでいる。しかし、説明としては不十分。
Y	Ichigo-Ichie is word made by Sen no Rikyuu. He is a man who produced the tea ceremony. The tea ceremony has three spirit of hospitality. First, the act of making a tea is called Temae. Second, "Wa-Kei-Sei-Jyaku" has the basic ideas od Sado. It shows that it is important to clear the atmosphere of the ceremony to soothe the guest's heart in tea room. Last, there are kakejiku and seasonal blossoms in the tea room. These bring sense of the season to the tea ceremony. We can't experience the same kind of the tea ceremony in our life at once. So Sen no Rikyuu made this word. ⇒エキスパート全ての情報を盛り込んでいるが、重要なところが絞り切れていない。
A	Sado has a 四規七則. It is rule of the tea ceremony. The host and the guests enjoy the time as the only chance to meet each other is sado. So, the ceremony master decorates kakejiku and seasonal blossoms in the chasitsu. Because, in that way the ceremony master shows that he/she wants to welcome his/her guests. Ichigo-Ichie comes from these spirits. ⇒エキスパート全ての情報を盛り込んでいて、シンプルだが、茶道の重要概念としての説明もされている。

授業前には多くの生徒が、四字熟語の「一期一会」と「茶道」の関連性を見出すことが出来ないうえに、自分の知っている「一期一会」の意味を、英語を使って説明することに苦労している生徒が多く見られた。授業後には、「期待する解答の要素」として挙げてほしかったキーワード（the only chance, meeting only once in a lifetime, today can never be experienced again, give the best hospitality に似た言葉）が、クロストークの発表の際にたくさん出てきていた。しかし、グループによっては、重要だと思われる要素を絞り切れずに、そのまま羅列してまとめきれずに、かえって分かりにくい説明になってしまっている（自分たちの言葉になっていない）ところも見られた。

（イ）　授業デザインの振り返り

ワークシートの評価基準を以下のように設定した。「エキスパートグループの全ての情報を盛り込んでいて、茶道の重要概念としての説明がしっかりとされている」をA、「エキスパートグループの全ての情報が盛り込まれているが、説明が不十分。重要なところが絞りきれていない」をB、「エキスパートグループの情報が不十分、説明が最後までされていない」をCとした。ワークシートの記述状況を評価したところ、33%(13名)の生徒がA評価で、46%(18名)の生徒がB、そして21%(8名)の生徒がCという結果であった。教師の事前に想定していた、エキスパートA,B,Cそれぞれの資料の中から、キーワードとなる言葉を抜き出し説明をすることが出来た「期待する解答の要素」を満たしていた生徒は3名(7%)と少なかった。

課題が難しくチャレンジングなものであることを想定して臨んでいたが、グループによっては、分かりやすさまでを考えきれる余裕がないグループが多く見られた。前時までに、日本の伝統文化である、「玉入れ、パン食い競争、竹馬」を4人1組で、そして「浴衣」についてジグソー活動にして臨んで来た成果もあり、「日本らしいものを別の言い方（外国にあるもので例えるとか）」で取り組もうとしているグループも多く見られたが、「茶道」というもの自体をあまり知らない生徒や、日本独特の「感性」というものを表現しずらいところに苦労していた。（特にエキスパートBの「和敬清寂」の言葉の意味や、雰囲気を大事にするという概念）そこで結果として、エキスパートBの内容をどう盛り込むかに時間がかかっている様子であった。

後日行った、個人で「一期一会」について説明する英文を書かせる記述式のテスト後には、外国人に、日本の文化を紹介する際に工夫したこと・感想・分かったこと・苦労したことなどを書くアンケートを実施した。以下は、生徒たちのコメント欄に書かれていた内容である。

①工夫したこと、頑張ったこと
- 一期一会の意味は、日本に住んでいる人は、だいたい知っているので、説明しようとすると、大事な部分が抜けたりするので、一回自分も何も知らない状態をイメージしたりすることを意識しました。
- この授業をする前だったら、ただ意味を英訳して伝えるだけだったと思うけど、今だったら、日本特有の文化の茶道の情報を交えて外国人が納得できるように伝えることができると思います。

②分かったこと、苦労したこと
- 日本と外国では、文化や習慣、考え方など違う点がたくさんあるので、お互いの文化を理解し尊重し合うためにも、日本の文化を外国人に英語で伝えることは役に立ってくるのかなと思いました。
- 文化はその国独特なものだと思うので、他の国にあるもの、また他の国の人でも分かるような物に例えるのが大変でした。

書かれていた英文は、難しい語彙に関するスペルミス等は見られたものの、キーワードとなる言葉をつなぎながら、分かりやすい説明を心がけていた。

（ウ）　実践を踏まえた授業の改善点

(i) 授業デザインについて

教科書の中で扱われていた「茶道」に関する説明を、エキスパートの資料として活用して読み込ませ、それらの知識が「一期一会」の説明につながるという課題の設定は、英文をただ読み込むのではなく、目的をもって読ませる意味では適当であったと考える。課題の難易度も、３年生のジグソー学習の集大成という意味で、チャレンジングではあるが解きごたえのあるものだったと考えている。ゴールの設定も、外国人（ALT）に英語で分かりやすく口頭で伝えるということを目標にしていたので、多少の文法的なミスはしても、伝わればいいことを念頭においていたので、評価も割り切ってできた。

(ii) 課題や資料の提示

発問に関しては、普段から取り組んでいる、各資料の重要であると思うところ（内容）をキーワードにして書き込ませ、準備しておかせることで、ジグソー活動での報告もスムーズにいったのではないかと考える。資料では未習後には注を付けるように心がけたが、それでもエキスパートＢの資料は少し内容が読み取りずらかった様子であった。

エキスパートの資料を作成する上で、筆者が苦労したことは、やはりこのエキスパートＢの資料の内容を何にするか、そしてその内容をいかに英文にするかであった。筆者としては、エキスパート資料として、他のエキスパートＡやＣの資料と形式を同じにしたい意図もあった。その結果、内容として選んだ「和敬清寂」は、生徒にとっては馴染のない言葉である上に、その資料を英文化した時に、未習語の多い、読み取りにくい資料となってしまっていた。

生徒たちは、このエキスパートＢの資料から、重要と思われる情報を抜き出そうとするときに、やはり内容が理解できる部分を中心に選ぶことが多く、あまり理解できない部分（未習語が多く含まれていたり、発音が出来ない単語が多く含まれる文章など）は、たとえそれが重要な情報であっても、選ばれることがないことが多かった。情報が正確に読み取れない、また誤った情報を伝えることで、ジグソー活動でも、エキスパートＢの内容をどう説明に加えていくかで悩んでいるグループが多く見られた。

改善点としては、「和敬清寂」のそれぞれの漢字の意味を英語で伝えるにはどう言えばよいかを考えさせた後（例えば「敬」なら respect each other とか）、この言葉が「一期一会」の説明にどうつながるのかを考えさせるシンプルなものにすることが考えられる。

エキスパートＢの資料に限らず、エキスパートＡの資料においても、エキスパート活動における課題を「What is "Temae"?」と提示したことで、授業者が資料から読み取ってほしかった、「『おもてなし』の精神として、主人が客人のために行う所作」ではなく、「点前」の意味を説明するだけに留まってしまったグループもあった。この点については、エキスパートにおける課題を、「Why do the host serve the tea with care?」のような、メインの課題に迫るような内容にすることができるのではないかと考える。

以上のように、メインの課題だけではなく、メインの課題の解決につながる、エキスパート資料における課題の大切さを改めて実感した。

(iii) 授業中の支援、授業の進め方など

授業の進め方としては、事前に「茶道」の概略を映像で見せ、そして茶具や掛け軸などの実物を見せることで興味を引き、外国人に英語で説明をするという状況設定をしたことで、生徒たちが「相手を意識した」英文作成に取り組んでいたところが良かった。前時までの「日本オリジナル」なものを英語で説明するという体験が、さらなる「ディープな日本」を説明する際に、先述の生徒コメント欄の中に見られたような、自国のことをもっと知る必要があり、さらに英語の表現の幅を広げようとするモチベーションにつながっているのではないかと考える。

時間配分に関しては、エキスパート活動とジグソー活動で１時間、クロストークに１時間を割り当てた。クロストークでは、全グループに、キーワードのみを提示しながら、原稿を見ることなく、ALT に説明を行わせた。事前に各グループの各個人で担当する英文を分担して臨んでいるとはいえ、相手（ALT）の反応を見ながら、言葉を選び、時には原稿に書かれていない言葉を付け加えながら、一生懸命に説明する様子をみとることが出来た。今回の授業のような流れで、教師が課題を提示し、英語で伝える場面設定をし、最終的には生徒が英語を使って ALT（外国人）に説明をする必要性を与え、考えた英文をキーワードにして伝え合う活動は、協調学習のみならず、普段の授業の中でも積極的に行っていきたい。

Ⅴ　成果と課題

１　今年度の成果

⑴　生徒の変容

①　コミュニケーション能力

（ア）相手を意識したコミュニケーション

知識構成型ジグソー法を用いて、本校英語科で求めているコミュニケーション能力を大多数の生徒が向上させることができたと考える。公開授業で例を挙げると、１学年は「相手のことを考えて観光地を考え英語で発表」、２学年は「相手のことを考え、沖縄の特徴を踏まえて、相手に勧める季節を英語で発表」できることが目標であったが、事後活動やパフォーマンステストの結果から見ると９割以上の生徒が達成していると言うことができる。授業後の生徒のワークシートのコメントからも、相手意識を持ち、より良い提案をしようとする姿勢がうかがえた。クロストークや事後活動においても、相手に自分の意見を提案する際、98%の生徒がその根拠も英語で伝えることができていた。３学年では「日本の文化を外国人に英語でよりわかりやすく説明」できることが目標であった。難しい課題であったが、授業後の生徒のコメントから、生徒が日本文化をより理解し、何も知らない外国人の立場に立ってわかりやすく説明する考え方が身についていると言える。学年の発達段階に即して、コミュニケーションにおける大切な要素に気づき、より質の高いコミュニケーション活動を行えるようになってきていると考える。

（イ）キーワードを用いた活動

今年から、自分の考えや班で話し合ったことを英文にしてから、それを読み上げて相手に伝えるのではなく、キーワードのみを書き、そのキーワードを手がかりに英語で伝える活動をジグソー活動やクロストークで行うようにした。難しいと感じる生徒がいるが、普段の授業でも英文を見ずに会話させたり、キーワードを用いて自分の考えを伝える練習を積み重ねることで、ジグソー活動やクロストークにおいても、キーワードのみを見て英語で伝えようとする意欲は高まってきている。

②　モチベーション

今年度の知識構成型ジグソー法の授業を通して、さらに自分が住む地域や日本の文化について、知りたいというモチベーションを高めることができたので、これからのコミュニケーション活動に生かしていけると期待する。

また、１学年から３学年まで学年が上がるにつれ、段階を踏み、より実践的な英語でのコミュニケーション活動に挑戦させることができた。ＡＬＴやＡＬＴの家族など、外国人に何かを伝えるという状況設定をすることで、より必要性を感じて生徒が活動に取り組むことができた。

知識構成型ジグソー法を用いることで、英語で伝えたいという生徒の意欲や生徒が伝えたくなるような内容を生み出しやすくなると考える。事前事後活動を比較すると、英語の表現の幅や英語を書く量も増えている生徒がほとんどであった。

⑵　教師の変容

①　生徒の実態の把握

課題の難易度の設定がとても大切である。少し難しいが何とか答えを導き、ジグソー活動では３人いるから解決できるという課題を設定するには、生徒の実態の把握が必要となるという意識が高まった。

②　エキスパート資料とジグソー活動の関係

エキスパート活動では３つのグループに分かれること

が多いが、各エキスパートの３つの資料を生かして１つの結論を出す方が活動させやすい。

例えば、２学年の実践例の場合、外国人にお勧めの沖縄観光の時期を提案するという課題で、エキスパート活動をＡ夏休みＢ冬休みＣゴールデンウィークに分け、それぞれの季節にある行事や食べ物、気候について話し合わせると、ジグソー活動ではＡ，Ｂ、Ｃを担当したそれぞれの生徒の英語力や発言力によって、どの季節が良いか決まってしまう可能性が高い。説明がたくさんできる生徒や英語力が高い生徒が提案した季節が採用され、他の季節の提案をした生徒の意見は不要となり、話し合いのモチベーションも低くなる。

しかし、エキスパート活動がＡ行事Ｂ食べ物Ｃ気候に分け、ＡＢＣそれぞれが３つの季節の特徴について話し合いを行い、ジグソー活動でそれらの意見をシェアした場合、全員の意見が採用されることになり、３人で１つの意見を作り出していくことになるため、自己有用感を持ち、クロストークにむかってのモチベーションを高めることもできる。エキスパート活動とジグソー活動の関係を考えた教材作りができるようになった。

③　知識構成型ジグソー法に適した題材

本校では、コミュニケーションにおける大切な要素に気づき、より質の高いコミュニケーション活動につながるように、知識構成型ジグソー法を活用している。よって、既習の知識を生かし、場面に応じた英語での会話やスピーチ、リーディング、文化紹介などの表現活動で知識構成型ジグソー法を活用することができた。また、クロストークや事後活動での発信を英語で行うことを目標とすることで、生徒が英語を使い自分の考えを表現するモチベーションにもつながっていると考える。そして、生徒同士で考え生み出した英語での表現は、実践事例にあるように定着率も高い傾向にある。

④　活動の中で英語で伝え合う場面を取り入れる工夫

昨年度まで知識構成型ジグソー法を用いた活動では、日本語の使用が主で、クロストークの際もグループで作成した英文を読むという発表が多かった。本校では、生徒がより質の高いコミュニケーション能力を身につける一つの段階として深く考えるために、話し合いの際の日本語の使用を認めている。

しかし、今年度は、エキスパート活動、ジグソー活動、クロストークにおいて、英文を書かせた後それらを読んで伝え合うのではなく、話し合いの際、キーワードの英単語のみを書かせ、伝え合う場面において即興で英語を話させるということを試みた。

生徒はキーワードを頼りに、その場で英語を伝えることにまだ慣れていないので戸惑っていた部分もあるが、伝えようという姿勢は見られた。多少の間違いがあっても、伝えようとする意欲を大切にしたい。エキスパートやジグソー活動の小グループ内で即興で伝えたり教え合うことで、クラス全体でのクロストークでの発表でもキーワードのみを使って自分たちの考えを伝えることができていた。

また、知識構成型ジグソー法以外の普段の授業の中でも、キーワードのみを使っての英語での会話の練習を取り入れている。その積み重ねが、知識構成型ジグソー法を用いた授業で生きていると考える。

⑤　教材作りにおける連携

知識構成型ジグソー法を用いた授業づくりを行うにあたっては、英語科はもとより校内研で他教科の先生方に実際に活動をして頂いたり、CoREF や他校の知識構成型ジグソー法を実践している先生からアドバイスを頂くことができた。実践の前に様々な視点から指摘やアドバイスを頂くことで、より良い教材作りができている。

また、これまで本校英語科で実践した知識構成型ジグソー法を用いた授業のワークシートなどの資料をデータとしてまとめることができたので、他校でも生徒の実態に応じてアレンジしてもらい、共に授業改善につなげることができたら良いと考えている。

２．今年度の課題

知識構成型ジグソー法を用いた授業では、生徒同士のインタラクションを活発にし、考えをより深めることが可能となり、より質の高い英語でのコミュニケーションをしようとする生徒のモチベーションをあげることができた。しかし、英語での表現力のより正確な運用能力も求められる。今年度は、文法事項を扱った知識構成型ジグソー法を用いた取り組みも行った。

取り組みの一つは、生徒が起こしやすい文法の間違いに気づかせるような活動をエキスパート活動の一部に取り入れたものであったが、気づいてほしい文法事項が身についた生徒とそうでない生徒の差があった。また、その１回の活動で文法の正確さを身につけさせることはできない。普段の授業で基礎基本の定着をさらに図る必要がある。そして、単元全体や年間を通して、文法事項のミ

スが少なくなるフォローを行っていく。さらに知識構成型ジグソー法など生徒が主体的に学ぶことができる方法を引き続き模索していきたい。

英語で考えや情報をお互い伝え合う活動においても、全学年でキーワードのみを用いて伝えようという取り組みができたので、さらに伝わりやすい表現が即興でできるように次年度以降も取り組んでいく。

生徒のコミュニケーション能力の評価においても、知識構成型ジグソー法を用いた１時間の授業のみで評価するのではなく、単元全体を通してついた力を評価しているが、さらに生徒のコミュニケーション能力が伸びる評価になるように検討したい。

３．３年間の総括

英語学習をさせていく際、training と learning の両方が必要であるが、知識構成型ジグソー法は、learning の部分で有効に使うことができる手法の１つであるということが分かった。また、より良いコミュニケーション能力の獲得を求める際、生徒自身に考えさせ答えを生み出させるために知識構成型ジグソー法を活用することが有効であると分かった。また、生徒が課題に対する解を出しその解を共有することで、様々な見方や考え方があることに生徒が気づくことができた。

次年度は、知識構成型ジグソー法以外の手法も用いて、伝える内容と的確な表現が伴ったさらに高いコミュニケーション能力を身につけさせることができるように取り組みたい。

引用文献・参考文献

(1) 中教審教育課程企画特別部会「論点整理」
平成 27 年 8 月 P11

(2) 教審教育課程企画特別部会「論点整理」補足資料(3)
各教科等における改訂の具体的な方向性
平成 27 年 8 月 P134

(3) 齊藤孝「コミュニケーション力」岩波新書、2004 年
P3

(4) 小林昭文「アクティブラーニング入門」産業能率大学出版部、2015 年 P62

・文部科学省「中学校学習指導要領」2008 年 3 月

・文部科学省「中学校学習指導要領解説外国語編」
2008 年 7 月

・文部科学省 英語教育の在り方に関する有識者会議
「今後の英語教育の改善・充実方策について　報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
2014 年 9 月

・中央教育審議会
初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）平成 26 年 11 月 20 日

・P. グリフィン　B. マクゴー　E. ケア編者　三宅なほみ監訳『21 世紀型スキル　学びと評価の新たなかたち』北大路書房、2014 年

・東京大学　大学発教育支援コンソーシアム推進機構「協調が生む学びの多様性　自治体との連携による協調学習の授業づくりプロジェクト」平成 25 年度報告書

・高木展郎「変わる学力、変える授業」三省堂、2015 年

・佐々木裕子「２１世紀を生き抜く３＋１の力」ディスカヴァートゥエンティワン、2014 年

・琉球大学教育学部附属中学校「研究紀要第 26 集」2014 年